

高校調査書

高校調査書記載内容は、学生個人の高校生活における観察記録として、成績に関するもの以外にも重要な情報を提供するものである。また、複数の教官により3年間にわたって観察された結果であるので、その真びょう性も高い筈で、入試選抜の資料としても十分な価値を有していてもよい性格のものであろう。

昭和61年度の入試では、推薦入学を実施している国立大学数は64大学、学部数では126学部となっていて、全大学の67.4%、学部の35.9%に及び、今後増加する傾向も見受けられる。この場合の選考は面接・小論文また共通1次試験の成績によることが多いが、これらと同等に調査書成績も重要な要素となっている。

ただ、調査書の抜本的利用については、記載内容が各高校単位での相対評価による部分がほとんどであるため、入試における学力面での公平さを考える時、多少の躊躇を感じるのが偽らざるところであろう。

このような理由などで、調査書に関する調査研究には意義があり、多数の大学で種々の面から研究が行われている。

まず入試成績との相関調査が挙げられる、概してある程度の相関があることを指摘しているが、共通1次試験、2次試験成績に分けたときよりも総合点数との相関の方が高くなっている。したがって、調査書評定平均値あるいは成績概

評と合格率との間には明確に正の相関がある。これはこの調査を実施したほとんどの大学で指摘している。

また、これと同時に現浪別での相関係数の違いや、同じ教科間での相関を調べた大学もあり、浪人の相関が小さく、教科別に調査したときは外国語での相関は比較的大きいが、国語との値は小さいとの指摘が多い。外国語で大きい理由はこの教科は日頃の着実な勉強が成績を良くし、その習慣が他の教科にも表れていると解釈している例がある。他方理科系の大学の中で回帰分析を行った結果、理科と数学が有意であるとの報告もある。

一定人数以上の志願者のある高校について、高校単位でこの調査を行った大学も幾つかあり、より大きな正の相関があると述べている。

大学に入学後の成績(学内成績)に関するデータが蓄積されてきたこともあり、調査書成績と学内成績との相関を調査し、入試成績との相関と比較している例も多い。

これによると、すべての大学で入試成績との相関よりも高校成績とのそれが大きいことを指摘している。学内成績として教養課程での成績と専門課程の成績とに分けた場合には、調査書成績と教養課程の成績との相関が大きいことを指摘する例が多い。教養課程の場合は学部あるいは大学単位でほぼ共通のカリキュラムによる授業が行われるが、専門課程では学科単位の授

業が主体になる影響が表れているとの解釈も成り立つ可能性がある。

このような調査とは別に成績概評別に入試成績や学内成績を調査した報告がある。ここでは概評Cの者に入試成績が平均以下や、学内成績が不振の者が多いこと。成績概評別に留年・退学者数を調査した例では、概評Aでは留年者は非常に少ないと述べている。

推薦入学に用いるべき基準設定を考慮した研

究では、評定平均値がある値以上で不合格となった者の中に大学での学習が十分可能な者のいる可能性を重回帰分析によって指摘している例などもある。

この他、調査書の行動及び性格の記録等の評定を数量化して、学内成績上位者の数量化評定の平均値は高い点数となっているが、低い評定点数の者は学内成績も良くないことを見いだした興味ある研究もある。